

# 生と死、崇高な輝き

子守唄フェスタ 童話「つららの坊や」

## 常田さんら初演の朗読

「ありがとう」と言っただけで光の中へ消えてゆく「つららの坊や」。26日に開かれたとやま子守唄フェスタでは、「納棺夫日記」の著者である青木新門さんが、納棺の現場で見た死の実相から作り上げた童話が、音楽と朗読で透き通るような崇高な輝きを放った。東日本大震災から1年を迎えようとする今、生きることは、死ぬとはの真摯な問いを持つ会場の一人一人の心に、常田富士男さんの柔らかな不思議な声が染み渡った。【一面に本記】



「つららの坊や」を朗読する常田さん（右）と、音楽を奏でる3人＝富山市の富山国際会議場

童話「つららの坊や」について話す青木さん（右）と西館さん



### 青木さん、西館さん対談

朗読に先だって、作者の青木さんと西館好子日本子守唄協会理事長が作品について語りあった。

青木さんは、「納棺夫日記」で仏教について書いた部分を誰にでも分かるようにと、童話の創作を思い立ち、五箇山の合掌造りの家に泊まった時に「朝、つららがピカッと光り、俺を書けと言っているように思えた」と、2007年に書き上げたいきさつを語った。

青木さんは「アング

### 「仏教から生まれた童話」

青木さんの童話「つららの坊や」は、溶け込んでなくなっても水と松田淳子さんのピアノにしてすべての生き物が生かし続けるつららの一生を通して、い

松浦伸吾さんのパン  
ドネオン、トイピアノ、  
で朗読されると、登場  
するつららやネズミ、  
松浦さんの独特の声  
が絶妙にからみあい、  
松浦さん作曲の音楽は  
清浄な雪の野を静かに  
描写した。

常田さんの朗読の  
声は、静かな感動で聴衆  
の心をひたひたと満た  
す。富山が初演と

トチノキが、目の前に生命を持つて現れるかのよう。うちわを使った鳥の羽ばたきや、水の流れなどの効果音も入り、臨場感たっぷりの朗読が続いた。

「死ぬことはちっとも悲しいことではない」「おまえがそこにいるだけで、うれしい」。トチノキのおじいちゃんの言葉を思い出しながらも、消えてゆく不安に揺れるつららの坊やは、やがて「ピカッ」と光り、にっこり笑って光の中に消えていく。富山が初演と

なる音楽付きの朗読は、静かな感動で聴衆の心をひたひたと満たす。

ルセンも宮沢賢治も、「にっこりほえんで死んでいました」と描写している。これは生と死のつながった世界を知った人でないと書けない」と語り、「つららの坊や」にもそれを表現したと話した。

西館さんは「大震災で多くの生が絶ちきられた。これは今のために用意されたような作品」と述べた。